
歌うバカと乱世の英雄達

猫獅子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌うバカと乱世の英雄達

【Nコード】

N8192V

【作者名】

猫獅子

【あらすじ】

路上ライブの帰りにトラックに轢かれそうな子供を助け……ずに見守っていると、何故か巻き込まれて死んでしまったバカな主人公はいくつかの力を貰って恋姫の世界に転生することになった
歌うバカは乱世でどのように生きていくのだろうか？

目覚めの………（前書き）

設定を変えて再び投稿！

目覚めの……

「マウストウマウちゅうん」

なんて声が聞こえて目を覚ました

え？マウス？ちゅー？てか口になんか引っ付いてる？ていうかなんか俺に跨がってね？

視線を少し下に落とすと金色の髪が目映った

キス？これキスですか？マイファーストキスですか？！

はじめてーのちゅう …………… よし次いつてみよう

クチュツ

「っ？！…ふあ、ちゅむ」

き、キターー！なんか普通にべろちゅー受け入れられたんですけど？！

これもついいいよな？大人の階段のぼっちゃってもいいよなあ！！

俺はキスしたまま金髪美女（顔見てねーけど）の胸に触れた

ペタツ……………？ペタペタ……………？？

小さい……………むしろない、っていうかなんか固いんだけど…

軽く、本当に軽く不安がよぎったがただのナイチチさんという結論を信じて次のステップに移ることにした

胸を触っていた手をそのまま下に這わせて金髪美女？の股間を恐る恐る触った

ここで一つ捕捉をしておきたい

俺は今高三なんだが彼女なんてものはいたことがない

作らなかつただけ！作れなかつたんじゃなくて作らなかつただけなんだよ？ほ、ほんとだよ、ナンパ百連敗なんて記録は持つて……

ああ持つてるよ！そのうち三十人に「ちよつと盛りすぎてて引くわ」
つて言われたよ！…あれ目薬さしてないのに目が潤んできちゃった
と、とにかく！俺は女と付き合つたことはねえし、女の体に触る機
会もなかった訳だ

長々としゃべって何を言いたいかつつつとだな、

なんか触り慣れた物が付いてるんだけど（泣）

しかもでけえテント立ってら（号泣）

ってことはあれか？俺がさつきからキスしてべろちゅーして胸と股間まさぐった相手はお、お、男……だったってわけか？

ふははっ……もうムリポ

「ウプツ」

あ、これ俺の声な？

「オボoooooooooooooo!」

あ、これ俺のゲロな？

「きやあああああ！」

あ、目の前になんかいるの忘れてた
でも、もう何でもいいや

やべ……もつかい吐きそ「おげええええ」なんか触り慣れた物が付いてるんだけど（泣）

しかもでけえテント立ってら（号泣）

ってことはあれか？俺がさっきからキスしてべろちゅーして胸と股間まさぐった相手はお、お、男……だったってわけか？
ふ……ははっ……もうムリポ

「ウプッ」

あ、これ俺の声な？

「オボ□□□□□□□□オオォー！」

あ、これ俺のゲロな？

「きゃあああああ！」

あ、目の前になんかいるの忘れてた
でも、もう何でもいいや

ヤベ……もっかい吐きそ「おげええええ」

「いやあああ！ウボアっ！もうらめえええええ！」

ちよつと吐き気が増しました

「もーひどいわねえ
思いきり飲んじやったじゃない」

orz

「ちょっと聞いてる?」

Orz

「あら? 放心してて全く反応しないわ
さっきまであんなに大胆だったのに」

Orz

「今はそつとしようかしら
あたし向こうでライダージェネレーションやってるから回復したら
声かけてちょうだい」

Orz

「ふむ……仮面ライダー?」

Orz (オーズ)!

「なんか今心なしか勢いが良かったような?
まあいいわ、じゃーね」

一時間後

Orz

二時間後

Orz

三時間後

zzz

四時間後

orz

五時k「長いわ！」

orz?

「それで会話しようとするんじゃないわよ！
っていうかあんた一回完全に寝てたでしょ？！」

「な、何のことが分からないでorzよ」

「ちよつと何か語尾みたいになってるわよ？！」

「いうか回復したんだったらさっさと声かけなさいよ！」

難易度クライマックスまでクリアしちゃったじゃない！シャウタが
超使いやすかったわ！」

「はあ？何言ってるんだよ？」

「一番強えのはバースに決まってるんだろ？伊達さんなめんなよコラ」

「あんなオッサンより後藤くんのほうがいいわよ」

「

「アアン？オッサンって伊達さんのことか？！」

「めえこそ後藤の新しい服ちゃんと見たのかよ？めちゃくちや浮い
てるじゃねえか！」

「分かってないわね、あの悪ぶってる感じが可愛いんじゃない
加齢臭ムンムンのオッサンにはない魅力よ！」

「おし、分かったさっきのことではば確信してたけど、お前俺の敵

だな？」

「ちよつと顔がいいからつて調子に乗ってるんじゃないわよ？」

現実を教えてあげるわ、クソガキ」

「上等だ、ゲイ歴が長いだけのやつには負けねえよ？なあゲテモノ？」

……

……

……

「うお？！てめえさつきからダンシングシュートを際どいタイミングでハメてきやがつて……でもこいつならどうよ？！」

「しまった！上手いことクロックアップのタイミングずらしたわね……え？！そこからまだコンボがつながるの？！」

「ハッハー、まだまだいくぜえ！」

「いやあああ！ま、負けたわ……」

「クククツ、これで二十勝十九敗だな？」

「くつ、まさかただの高校生がここまで強いとは思わなかったわ」

「てめえも変態のクセになかなかやるじゃねえか、こんだけゲームで負けたのは久々だぜ」

ハイ、ただいま変態と一緒にゲームでバトってます

最初は拳での話し合いになりそうだったんだけど

「正直痛いのがヤダ」つつつたら変態も「あたしもー」とか言っ
て、じゃあゲームで決着つけることになったのよ

ルールはクライマックスヒーローズで先に百勝したほうの勝利

正直ゲームは得意なほうだからソッコーで終わらせるつもりだった
んだが、意外と相手もなかなかの使い手だった

ちなみにさつき使ってたのは俺がキックホッパーで変態が電王な
リュウタさんマジパネエっす

「つと……そういやさ」

「スキあり！……ん？どうしたの？」

「ねえよ！……いや此処つてどこよ？」

だだっ広い白い空間にテレビとゲームと俺らしいねえんだけど…

…あと俺のゲロ

「え？いまさら？つてあゝあ負けちゃった」

「フフン、ダディがオンドウル王子に勝てるわけなかるっ」

「くっ！せめてダチヤアナザンにも必殺技があれば…

はあ、少し休憩しない？」

「おー、俺も少し目が痛えわ」

「じゃあ休憩ついでにあたしの話でも聞いて貰えるかしら？」

「いいぜー、なんもしねえのも退屈だしな」

「それじゃ話すわね」

あなた…実は死んでるのよ？」

………は？

「なにそれケンシロウの真似か？

似てねえし台詞もちげえよ？」

「いやそうじゃなくてね？」

あなたは死んだのよ？

ドゥーユーアングスタン？」

「質問！何故にカタカナ？」

「そこに触れるな！

作者の頭の残念さがバレるでしょうが！」

額かざるを得なかった……

「え？俺死んでんの？」

「じゃあ今俺ユーレイ的な感じか？！」

「まあそんな感じがしら」

「で、死んだ時のこと覚えてる？」

死んだ時、ねえ

えーと休日在路上ライブして、腹減ったからコンビニでパン買って歩きながら食ってたんだよ
で、ふと横見たらトラックに轢かれそうなガキがいたんだよな

「そして俺はそのガキを助けて死んじまったわけか…」
「違うわよ」

あんたはその子見ながらパン食い続けてたわ」

だって死にたくなかったしい
てかそう簡単に命なんぞかけられつかよ

「それでそのあとなんだけど……子供を助けようとトラックを殴り飛ばした子がいてね

その子が飛ばしたトラックに潰されて死んじやったのよ」

「……………完全とばっちりじゃね？」

てかトラック殴り飛ばしたの？どやって？

「実はそのトラック殴り飛ばした子ってあたしが生き返らせた転生者だったのよねー

あ、転生者ってしってる？」

あれだろ？能力貰ってオリ主無双するやつだろ？

「はい正解」

その転生者があんたを殺したお詫びに転生させてやって欲しいって言うてきてね、正直メンドかったけど最近退屈だったし生き返らせてあげることにしたのよ」

「いやなんかもう………最初っから最後まで俺の意思関係ねえじゃん」

俺にいつぺん話通せや

ちゃんと聞くよ？

「まあまあ、あんただってやりたいこともっとあったでしょ？」

そりやまあ彼女とか彼女とか彼女とか

「…意外と欲がないわねあんた」

「まあ彼女のこと以外は結構満たされてたし」

「でもあなたって孤児院の出身だったんでしょ？」

家族のこととかお金のこととかかなり苦労したんじゃないの？」

「よく知ってるな」

つつても親は初めからいたことねーからいまいち感覚わかんねえしよ
孤児院の奴らは家族みたいなもんだし、友達は少ないっつーかアレ
だったけど…

金は働きゃ問題なかったしな、メンドイけど…」

その上やりたいことはやってきたしな、彼女いなかった以外はなん
の問題もねえだろ？

「へえ…なら5つ願いを叶えてあげるって言われたら何を願うのか

しら？」

5つ？多いなあ…

「……………美味いカレー食いてえ」

「……………はあ?!」

うお?!いきなり大声出されたらびつくりするだろが!

「え?カレー?!ワケわかんないんだけど…」

「いや美味いじゃんカレー」

「美味しいけど、だからって……………ええー……………」

なんかめちゃくちゃびつくりされてるな

「ま、まあいいわ

2つ目は？」

「えーと、美味い「食べ物以外にして貰えるかしら」ええー……………じや四次元ポケットとか便利そうだな」

「秘密道具ね、どこでもドアなんかいいわよね」

「いやそうじゃなくてポケット単体のことだけど？」

「あれ中身入ってないただの入れ物じゃない？」

「いや何でも入るんだから便利だろ

楽器って持ち歩くと重いしかさ張るしで結構大変なんだよ」

「そ、それだけ？」

「十分だろ？」

また信じられないって顔してんな

「み、3つ目も聞こうかしら」

「うーん、音楽で有名になりたいとか思わなかったけどいつぺんにかいステージで思う存分歌って見たかったかな」

「何で有名になりたいって思わなかったの？」

「色々めんどそう」

「知れば知るほどあんたのことがよくわかんないわね……ハイ4つ目は？」

変態少し投げやりになってね？

「…マクロスのシェリルノームに一回会ってみてえかな憧れだし」

「会っただけなの？」

あんたなら彼女にしたいって言うと思ったんだけど」

「確かに彼女は死ぬほど欲しいけどな…そんなイカサマで惚れられても嬉しくねえんだよ

あんま馬鹿にすんなよ、変態？」

「ふーんじゃあラストの願いを聞きましょうか」

したいこと…あるにはある

あるんだが、かなりハズいんだよ

「あー、うー、えーと……………か、仮面ライダーに変身してみたい」
「……………いきなり転生者らしい願いが出て逆にびっくりしちゃったわ……………」

「こ、高校生にもなって仮面ライダーに変身したいとか……………やべえ、超ハズいわ

やっぱさっきのなし！」

「うん、それ無理」

めっちゃイイ笑顔じゃねーか、チクショー！

「あんたの願いは全部叶えてあげるわ」

「あ？叶えるってどうやって？」

「あんたを別の世界に飛ばせば多少の能力なんかは許容されるのよ」

「ん？俺生き返れんのかよ？！」

「あらさっき言ったわよね？」

「言って……あれ？言ってたっけ？」

「頭残念なの？」

「それは作者だろーが！

俺は多少物忘れが激しいだけだっつの」

「ちなみにここに来て最初に何があったか覚えてる？」

何って………

「オボロロロロオーー！」

「思い出すの時間かかりすぎでしょ」

イカン……こりゃ一生忘れられんかもしれん

「とりあえず別世界だけでも生き返らせてあげるからそこでやり残したことがあればやってきなさい！」

「俺了承した覚えねえんだけど……」

「何言ってるんのよ、さっきしたじゃない」

「あーそうだったっけ？」

確かにそんな気もするような」

「………ちよっと頭の具合心配になってきちゃったわ」

なんか言ってるけどスルー！

「てか別世界って俺が住んでたこと似てんのか？」

「あんたが住んでた世界よりだいぶ昔だけど一応ゲームの世界だからある程度の常識は通用するとおもっわよ」

「お！ゲームってなんのゲームなんだ？」

ゲームは結構プレイしてるからな、内容はほとんど覚えてねーけど

「真・恋姫＋無双っていうゲームよ、ちなみにエロゲね」

「エロゲはやったことねーなあ

全年齢版は少しあるけど」

「下手すると簡単に死んじゃうからせいぜい頑張りなさいよ」

「大丈夫スルー& amp; ダッシュ（見てみぬふりと逃走）がデフォだから」

「主人公とは思えない台詞ね」

主人公って何？

「つとぼちぼち時間ね」

変態が呟くと同時に足元から俺の身体が消え始めた

「おー？！ガンツみてーだな」

「今あんたを向こうの世界に飛ばしてるところよ」

「ふーん、じゃあお前とはお別れか」

「あら？寂しいのかしら？」

「んなわけねーだろ！」

「あら残念ね

あとこれはあんたにあげた能力のリストと使い方よ」

変態が差し出した紙を受けとってポケットに突っ込んだ

「さっきの願いつてそういうことかよ
まあ……………サankyな」

「あんたってツンデレだったのね」

「っ、ツンデレちゃうわ!」

孤児院の奴らにもよく言われてたけど

「じゃあな最初以外は結構楽しかったぜ」

「あたしは最初が一番楽しかったけどね!」

「てめえマジ変態だな!」

「まああたしも結構楽しかったわよ

またあんたが死んだらさっきの続きをしましょ」

アッチじゃねーよな? もちろんゲームのほうだよな?!

「あたしはどっちでもかまわないわよ」

「全身全霊でゲームの相手をしてやるぜ!」

「……………」

「なあ?」

「どうしたの?」

「もうちょい転送早くなんね?

まだ腰あたりなんだけど……」

「うん、それ無理」

そのあと十分くらい駄弁りながら転送されました

目覚めの……（後書き）

ユルユルといきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8192v/>

歌うバカと乱世の英雄達

2011年10月7日08時14分発行